

ウルリム
響

響

URL <http://www.nskk.org/province/ikuno>

E-mail: nskkikuno@gmail.com

特定非営利活動法人
聖公会生野センター機関誌
第61号
2015年9月10日発行

題字：康秀峰

聖公会生野センター 検索

わたしは自分がちゃんと生きているかどうかを確認するために、いくつかのことばや文章を大切にしてい

ます。その一つに **卵が高い壁を溶かす** 著名な作家村上春

樹が、エルサレム賞という文学賞受賞式で語ったメッセージがあります。「高くて固い壁があり、それにぶつかって壊れる卵があるとしたら、私は常に卵の側に立ちたい」。正直ちゃんと立つことができているか、自信はありませんが、わたしは壊れやすい殻をもった卵の側に立つ者でありたいと願っています。

今大きな問題となっているヘイトスピーチに代表される憎悪に満ちた差別表現、沖縄の基地、核兵器、原発、・・・・これらは高い壁です。これらによって押しつぶされる人々、在日韓国・朝鮮人をはじめとする被差別民衆は卵の側です。しかし私たちは一人一人を見ると、多かれ少なかれ、皆卵ではないでしょうか。私たちはそれぞれ、壊れやすい殻の中に入った個性的でかけがえのない心を持っている卵です。村上春樹は高い壁の名前を「システム」と呼びます。「システム」は私たちを守る存在と思われているが、時に自己増殖し、私たちを押しつぶし、差別心を増幅させ、さらに他者を冷酷かつ効果的、組織的に抑圧する力を持っています。今世界のあちこちで、憎悪を伴う差別的表現が深まり、人間のいのちがないがしろにされています。日本でも、差別を助長し固定化しようとするシステムや、戦争できるシステムを構築しようとする動きが活発です。しかし私たちは、国籍、人種、民族

の違いはありますが、一人一人かけがえのないいのちを神から与えられた存在であります。

磯 晴久



上記の聖句「これらの小さい者が一人でも滅びることは、あなたがたの天の父の御心ではない」（マタイ18：14）とある通りです。

小さい者のいのちが、世界のあちこちでないがしろにされています。「システム」と言われる堅固な高い壁に直面している壊れやすい卵には、どこからみても、勝ち目は見えてきません。壁はあまりに高く、強固で、冷たい。もし、私たちに勝ち目が見えることがあったら、私たち自身や他者の独自性（たとえば在日韓国・朝鮮人の伝統や文化）やかけがえのなさを、さらに魂を深く互いに交わらせること、つながることで得る温かみを強く信じることから生じるのではないのでしょうか。わたしたちは、魂深くしっかりとつながりたいと思います。以前沖縄教区の上原榮正主教から韓国には、卵が壁に何回も何回もぶつかって、ついには壁を溶かしてしまう話があるよと聞きました。これはすごいと思いました。今聖公会生野センターが取り組んでいることは、人と人をつなげ、高い壁を溶かそうとする働きではないでしょうか。

（いそ はるひさ 日本聖公会大阪教区主教、
聖公会生野センター理事長）

プール学院高校三年生・のりばんでボランティア体験

入試制度の多様化に伴って、高校3年生の三学期は進路の決まった人にとっては「何もない学期」になりがちです。数年前からプール学院高校では進路の決定した高校三年生が1月から2月にかけて、聖公会生野センターでボランティア体験をしています。もっぱら高齢者の食事会の「のりばん」での体験です。

今年は皆さんの感想文を掲載しました。高校生らしい率直な思いが感じられるでしょうか？

多田杏佳さん

初めて聖公会生野センターに訪れた時は、少し緊張しました。料理を作るということを、あらかじめ聞いていましたが日頃から料理をしないため邪魔にならないかととても不安でした。しかし聖公会生野センターに来ているお手伝いの方々がとても優しく接してくださり頑張ろうと思いました。食事をしている時の聖公会生野センターに来ている方々がお茶を入れてくださったり、ティッシュをくばられたりなどのその優しさが嬉しかったです。

学校の授業も終わり、友達と弁当を食べることがなくなったため、この場で改めて大勢で食べるご飯はおいしいということを実感しました。

聖公会生野センターに来ている方とお話するのはとても楽しく、穏やか気持ちになりました。三回のみ聖公会生野センターにボランティアとしてお邪魔させていただきましたが、得ることが多く、とても勉強になりました。とても良い経験だったと思います。



小高紗聖さん

私は今回、3回ののりばんでボランティアを通じて、多くのおばあさんと触れ合うことができました。のりばんは生野区にあるので、来られていたおばあさん方は在日韓国人の方で、私も生野区で生まれ育ち、祖父も韓国からきたので、のりばんのおばあさん方にとっても親近感が湧きました。そして、若い時に韓国から日本に来たおばあさん方は、今までどうやって生きてきたのかなと考えまし

た。きっと1日1日を必死に生きてきたんだろうなと思いました。私には一生経験することのないような悲しいことや、たくさんの苦勞をされてきたのかと思うと悲しくなりました。私が生きている時代と環境が、どれほど恵まれているか改めて実感しました。

でも、のりばんに集って楽しそうにおしゃべりしている姿を見ると、私も嬉しい気持ちになりました。おばあさん方と韓国や、済州島の話をしてとても楽しい時間を過ごすことができました。今回、ボランティアに参加して、おばあさん方と接するなかで考えさせられることがたくさんあり、私にとってたいへん貴重な経験になりました。ありがとうございました。

辰本珠里さん

今回、三度にわたってのりばんに参加させていただきましたが、私はボランティアをすることが初めてでした。

のりばんに参加する前は、韓国のことをほとんど知りませんでした。しかし、のりばんに参加して、韓国料理を作り、皆さんで頂き、おばあちゃん達と話をしたので、韓国について知ることができました。そして、おばあちゃんたちがどれだけ長年、日本で暮らしていても、自国の価値観や文化を大切にしているということを感じました。異文化を理解することは当然必要であるが、異文化を理解する前にまず自国の文化を十分に理解し、大切にすることが必要だということに改めて気付きました。このボランティアを通して、貴重な体験が出来たため、大変良い経験になりました。これから、積極的にボランティアに参加したいと思いました。

福井悠加さん

聖公会生野センターで3日間ボランティアさせていただき、韓国料理を大人数分作り、韓国の方々と一緒に食事しながらお話したり、と普段あまり経験できないことをしました。私はもともと韓国のアーティストが好きで、韓国の文化にも興味があったので、このボランティアを通じてより関心が深まりました。

また最終日に見せていただいたヘイトスピーチの映像にはとても心が痛みました。施設の利用者の方々は、昔たいへん苦勞をされたと聞きましたし、歴史については日本史の授業などで少し知識もあったのですが、今でもこのような現実があることに衝撃を受けました。施設に来ている方はとてもフレンドリーな人たちばかりで、ボランティアのある水曜日がくるのを本当に楽しみにしていました。ボランティアなのに、3日間で私自身が施設の方から学ぶ事がとても多くて、これからの生活に活かしていきたいと思いました。3日

間という短い期間でした。お世話になりました。ありがとうございました。

中田実来さん

今回は学校からの課題としてボランティアに参加しました。初日は何も分からず、ただただ指示されたことをこなしていくだけでした。緊張していて、利用者の方に話しかけることも出来ませんでした。ですが、みなさんすごく優しく私たちのことを気にかけて下さり、とても嬉しかったのを覚えています。慣れるとマルスンさんたちや、利用者の方に自分から話しかけられるようになりました。ご飯が炊きあがる間や、全員が揃う間にみんなでニュースを見てあれこれと話し、そして教えてもらうのが新鮮で楽しかったです。

初めは、学校からの課題で参加したこのボランティアでしたが、“行かされている”という感覚ではなく“行きたい”という感覚で毎回参加することが出来ました。野菜の切り方や、盛り付け方、韓国語や政治のことなど役立つことをたくさん教えていただきました。たった三回でしたが、色々と学ぶことが出来て、すごく楽しかったです。ありがとうございました。

岡本ひかりさん

今回私はボランティア活動として初めて聖公会生野センターに行かせていただきました。行く前までは、緊張と不安がありましたが、生野センターはまるで自分の家のようにくつろげ、安心する雰囲気があり、その気持ちはすぐに消えました。「のりばん」のお手伝いとして一緒にお料理を作りました。家で作るチヂミと少し違う調味料を使うので味付けがやはりコクがあり美味しかったです。また、大人数で食べるご飯はより美味しいと思います。のりばんに来ていらっしゃる在日の方々にも気軽に話しかけてもらえ、昔にお話などもして下さいました。そこで、私たちが分か

らないような苦労があったということを知りました。最終日に「ヘイトスピーチ」の動画を見ました。そこには私の想像もつかなかった事が起っており、衝撃的でした。このような酷い事は決して起ってはいけないことです。全人類が多様性を認め合い、平和が訪れる事

を願っています。この活動を通じてボランティアは自分が何かお手伝いをするというだけでなく、逆に沢山学ぶ事が出来るのだとわかりました。これからも色々な活動に参加したいです。今回のボランティアで関わった人皆さんに感謝します。

= 写真で見る生野センターの活動 =

済州大学

済州43事件の慰霊の旅で済州大学の在日済州人センターを訪問



のりばん

週3回の楽しみ！のりばんのメニュー



= 写真で見る生野センターの活動 =

韓国社会宣教旅行



【上】

大韓聖公会・社会福祉施設大会

【下】ソウル教区ヨンサン分かち
合いの家：フィリピン人の信仰共
同体での聖餐式のあとで



子どもプログラム

秋から春にかけて子どもプログラムを実施。
この日は中国の正月のお菓子作りです（写真右）



弘益大学インターン



韓国の弘益大学の学生9名が7月にインターンで1ヶ月生野に滞在しました。
日本語、日本社会、そして多くの場所を訪問しました。
草の根の交流が新しい関係を作っていくことを願っています。

『朝鮮と日本に生きる』—済州島から猪飼野へ 金時鐘 著 (岩波新書)



86歳の時を経て詩人金時鐘さんが、いま・ここにいる！と驚嘆とともに思わせられる一冊。

現代日本語詩の世界に屹立する金時鐘

さんがいま・ここにいる、その来歴については、詩人自身によって語られ書かれてきた。なので、この自伝語りに記された「物語」の大筋は多くの読者に知られているだろう。

植民地（政策）とは無垢な幼少年にとってどんな顔をしてやってきたか、日本のやさしい詩歌がなぜ「皇国少年」の揺籃になったか。

「解放」の夏とはシダヨン青年にとって何であったか、民衆のたたかいと白色テロの時代のカオスのなかで、生き直しはどのように為されなくてはならなかったか。「四・三事件」をどのように生きたか、生きがたかったか。そして、66年を生きしのぐことになる日本へ。

詩人が生きた人生譜と体験の重さを思えば、礼を失する概括ではあるが、いま折々の心境と自省、思念を織り込みながら濃密に記憶をたどっている。それは自分語りの形式をとりながら、植民地の一側面と第二次大戦後に東アジアの一郭で起きた過酷な歴史の証言となっている。いや、詩人が歴史でもあったのだ。渡日以来、二度とまみえることなく逝った父と母への想い、幼少時から青年期に出会って理不尽な歴史の坩堝に吞まれて消えて行った誰彼の記憶、それらもまた詩人が生きた時代の証言である。

本書がよみがえらせる記憶と描写は、綿密だ。一人の人間の等身大の軌跡であることに

磯貝 治良

よって、証言はいつそうリアリティを獲得する。それが一種、淡々とした筆致でつづられているのは驚きだ。ついついリズムにつられて、体験のすごさを読みすごしそうにもなる。

もともと書物が人の生（死）を十全に語ることはできない。たとえ平凡にみえるそれであったとしても。ましてや、歴史を背負わされて生きた人生にあつては。だから読者は、ことばが伝え得ない地点まで想像力を開かなくてはならない。読者わたしにとって、なかなか厄介な自問ではあるが、そうして初めて『朝鮮と日本に生きる』は成立する。

それにしても語り口の、なんという妙味だろう。まさに詩人金時鐘の文体の独自さが、散文語りにつらぬいている。波乱この上ない人生譜とそのエピソードの軌跡なのに、それを少しずらして異化するかにみえる語りのリズム。ときに痛切のなかにユーモアさえにじむ。それが人間に向けるまなざしのかげがえなさによってもたらされるのはまちがいない。あー、詩人はいま人間について語っているのだ。しばしばそう思わされた。

そして、エゴを嫌って自己を対象化する、ときに諧謔と見まがえるほどの自己省察で。金時鐘さんの詩がそうであるように。

本書は、渡日して詩人金時鐘が誕生する入口あたりで終わっている。宣伝めくが、最後に付記する。今年2月に三冊めの〈在日〉文学論『〈在日〉文学の変容と継承』を新幹社から出した。そのなかに60枚ほどの評論「金時鐘の詩を順不同に語る」を収録した。金時鐘詩についてはそちらで一読を。

(いそがい じろう

在日朝鮮人作家を読む会代表)

コラム・一粒の麦

戦後70年「最後の総理談話？」

呉 光現

今年に入ってから「戦後70年」が大きな「課題・問題」になってきた。ここで「課題・問題」と書くのは正直言って使いたくない表現であった。「課題」は日本政府がどのような「総理談話」又は「総理の談話」を出すのか？それがアジア、特に韓国や中国でどのような「問題」になるのか……。これは春に来日したドイツのメルケル首相の「忠告」、アメリカ政府筋からの「要望」など日本政府にいろんな形で問いかけがなされてきたのも先の50年談話、60年談話と違うところだった。

果たして8月14日に閣議決定された「総理談話」が発表されたがこれは「侵略」「植民地支配」「反省」「謝罪」という言葉だけが一人歩きした結果として私は大いに失望した。ここで「総理談話」と「総理の談話」の違いを書いておきたい。閣議決定されたものを「総理談話」、そうでないときは「総理の談話」と言われる。簡単に言うと総理談話は時の日本政府の正式な意思表示とも言えるのである。

失望したのは安倍総理が4つのキーワードを技術的に使用しただけであり、総理の主体（内閣の主体）がなかったということだ。そしてそれはかつての50年、60年の談話が韓国・中国をはじめとしたアジアに向けて語ったのと違い、生中継で



5月の社会宣教ツアーでソウルの日本大使館前の少女像訪問

観ながら「あっ、これは欧米、特にアメリカに向けて語っている」と強く思った戦争体験をその時代を大人として振り返るときに当時、15歳から20歳位が限界であろう。その人たちは今年で85～90歳である。10年後に80年談話が出るとするならば【体験者】がほとんどこの世を去った時代になっているのだ。だからこそ10年の節目としての70年談話が世界的に注目されたのである。

安保法制が国会で論議されているが言うまでもなく「憲法違反」の法案である。聖公会も管区、聖公会生野センターがたっている大阪教区もいろんな形で反対の立場で表明されている。戦争、植民地によって与えた傷、受けた傷をきちんとせずに今後の日本はどうしてアジアと一緒に歩んでいくのだろうか？

戦後70年は憂鬱な夏になった。

■春に出す予定のウルリムが大幅に遅れましたことをお詫びいたします。今後はこのようなことがないようにいたします。又、ご意見をお寄せください。■20年以上ぶりに夏の甲子園に行きました。皆さん気がついたでしょうか？大阪偕星学園高校の袖には「OSAKA」ではなく「IKUNO」と書いてありました。激戦区の大阪から100年目にして初めて生野区から甲子園に行きました。

■甲子園でもう一つ。東海大相模高校優勝おめでとうとともに今年も東北代表が決勝戦で涙。

■安保法制に反対して学生が立ち上がっている。立教大学や私の卒業大学も反対の声明を出している。そして東京の高校生では反対の声。一人一人が考えて行動しているこの日本社会に一つの希望を見る。「殺すな、殺されるな」はいかなるイデオロギーを超えて人類普遍の価値観にしたい。

■これを書いているときに大阪の寝屋川の中学生在が亡くなったというニュース。野次馬的にいろんなことを言うのは簡単だがかけがえのない人の命が奪われたことに悲しみ。■南北朝鮮で軍事緊張の一報、ウルリムが世に出る頃にはその緊張は溶けていて欲しい(2015/8/21記)。

(ぴつくあんちゃ)

＝ 特定非営利活動法人聖公会生野センター会員総会報告＝



6月28日、午後3時から大阪聖パウロ教会にて定時総会が開催されました。

例年の通り2014年度事業・会計報告、2015年度事業方針・予算案が審議、承認されました。今年は退任する役員が3名いらっしゃり新たに3人の役員が選出されました。それに伴い新理事長に磯晴久大阪教区主教が役員に選出され7月1日付けで理事長に就任しました。今後ともよろしくお願ひします。

聖公会生野センターへのご支援をお願いします

◇正会員 年額 1口 10,000円

◇後援会員 年額 1口 3,000円から

・郵便振込 00910-1-321780 「聖公会生野センター」

◇自由献金・クリスマス献金

・郵便振込 00910-1-321780 「聖公会生野センター」

・銀行振込 三菱東京UFJ銀行 東大阪支店

普通預金 4654965

「特定非営利活動法人聖公会生野センター」

発行所：聖公会生野センター

〒544-0002

大阪市生野区小路3-1-19

TEL 06-6754-4356

FAX 06-6224-7869

E-mail: nskkikuno@gmail.com

<http://nskk.org/province/ikuno>

発行人：磯 晴久

編集人：呉 光現